

発表形式：口演  
セッション：F. 病診薬（薬薬）連携・チーム医療  
優秀演題賞：応募しない  
初心者発表：初心者

## 保険薬局における薬薬連携で得た情報の活用とその有用性

吉田 志保<sup>1)</sup>, 下川 友香理<sup>1)</sup>, 平島 八恵子<sup>2)</sup>, 石原 孝<sup>1)</sup>  
そうごう薬局 天神中央店<sup>1)</sup>, 総合メディカル（株）人財育成部<sup>2)</sup>

### 【背景・目的】

応需先との薬薬連携が進み、レジメン情報が医療機関ホームページ上へ公開され、処方箋へのレジメン記載も開始となり、合同勉強会を通じて、抗がん剤の副作用対策・指導内容の病院・薬局間での統一化を行ってきた。

薬局においても、薬薬連携で得た情報をもとにがん患者への標準確認項目（身長・体重・体表面積、がん種、レジメン、病期、PS、手術の有無、臨床検査値、各抗がん剤の特徴的な副作用発現状況など）を設定し、患者ケアに活用している。

今回は、がん患者に対し薬学的介入を行った事例を調査することで、薬薬連携で得た情報の有用性を検討した。

### 【方法】

2015年4月～9月の期間中、応対時にかん治療中と確認できた患者497名を対象に行った医療機関への疑義照会・医師へのトレースレポートの各件数とその内容を調査した。

### 【結果】

調査期間中の各項目の件数は、疑義照会44件、トレースレポート14件であった。

内容は支持薬の処方確認・提案33件、抗がん剤の処方内容確認6件、薬局での指導内容報告6件、末梢神経障害に対する服薬支援（PTPシートから薬剤の取り出しが困難なため一包化提案など）4件などであった。

### 【考察】

薬薬連携を通じて病院-薬局間での抗がん剤による副作用対策・指導内容を統一することで、院内で使用している支持薬の積極的な処方提案が可能となった。

また、レジメン情報とともに標準確認項目に基づき患者から情報を聴取し治療コースを把握することで、抗がん剤の処方内容確認や副作用好発時期にあわせた発現状況確認、支持薬の処方提案、服薬支援が可能となった。

以上より、薬薬連携を深め、そこから得た情報を保険薬局での服薬指導に活かすことにより、外来がん患者に対するよりの確かつ積極的な薬学的介入が可能になると考えられる。